

## 金冠を持っていた人物について

1年1組 海野 小雪

### 1. はじめに

私は、以前住んでいた前橋市山王町にある、山王金冠塚古墳について調べようと思った。山王金冠塚古墳は、前橋市にある朝倉・広瀬古墳群の南に位置し、6世紀後半に造られた全長約53mの前方後円墳で、たくさんの埴輪や武具、馬具などが出土している。その出土品の中でも、金冠が出土し、それが韓国の慶尚南道にある、梁山夫婦塚古墳から出土した冠とよく似ていることに驚いた。古墳は他の群馬の古墳に比べて小さいが、どうして冠を持てたのか、疑問に思った。そのため、その冠を持っていた人はどのような人か調べることにした。

私はまず、金冠塚古墳の墓の主は、冠を作ることでできる技術を持った渡来人か、冠を持って日本へ領地を広げに来た新羅の王族か、新羅人に認められて冠を送られた実力の持ち主なのではないかと考えた。



2020.8.1 金冠塚古墳にて撮影

### 2. 金冠塚古墳の出土品から考える

金冠塚古墳があるのは、前橋市山王町1-13-3で6世紀後半（古墳時代後期）に作られた前方後円墳である。大きさは、全長約53mで、前方後円墳としては小さめである。金冠塚古墳は、朝倉広瀬古墳群の中にあって、あたりには約150~200基の古墳があったといわれている。

金冠塚古墳からは、金冠の他に鉄鉢、大帯、轡、刀、冑等が出土していて、東京国立博物館のホームページから画像を見ることができた。

出土した物から考えると、金冠だけではなく、武器や冑が出てきていることと、それを作るような跡についての記載は見当たらないことから、冠を作る技術者ではなくて、武器を持って戦った武人であると思う。

また、金冠を持っているから王族なのではないかと考えたが、領地を広げに攻めてきたとすると、内陸の群馬にいきなり攻めてくるのはおかしいし、王族なのにただやってきて、水田地帯に住み着くのも変である。古墳の大きさも王族にしては小さいと思うし、王族であるなら金冠以外にも珍しい出土品が出てくると思う。

日本に来たり、招かれたりする渡来人は、技術・知識のある人が多いと思う。よって、この人は武人であるので渡来人ではないと考えられる。

### 3. 金冠塚古墳の場所から考える

朝倉広瀬古墳群は、前橋市文京町、朝倉町、広瀬町、山王町、東善町にあって、現在は、住宅地が広がっていて、ほとんどの古墳が消えてしまっている。副読本の「群馬県内の古墳の大きさベスト 20」によると、群馬県第 6 位が八幡山古墳、7 位が前橋天神山古墳になっているが、この 2 つが朝倉広瀬古墳群の代表的な古墳である。

八幡山古墳は、3 世紀の終わりに作られた全長が 130m もある、東日本最大の前方後方墳である。

若狭徹著『前方後円墳と東国社会』を読むと、「三世紀前半になると、上毛野と北武蔵の低湿地には東海西部系の外来集団が大量に移入してきた。」と書いてあり、住居跡や墳墓や農耕具から、東海地方から多くの人々がやってきて、それまで人が住んでいなかった低湿地に水田を作って定着したことがわかっている。朝倉広瀬古墳群のあたりも、この時代に水田が作られて開発された地域であることが水田跡からわかる。

前橋八幡山古墳に埋葬されている人は、古墳の大きさから、そのような水田開発をした人たちのリーダーだった人と考えられる。

また、もう一つの代表的な古墳の前橋天神山古墳は、4 世紀の初めに作られ、現在は全体が残っていないが、全長 129m と、八幡山古墳と並ぶほどの大きさの前方後円墳である。

右島和夫著『群馬の古墳』によると、この時代の前方後円墳は各地の有力古墳で、ヤマト政権との密接な関係ができた証として、前方後円墳の築造技術が伝えられたと考えられている。また、天神山古墳は、大きいだけでなく、ヤマト政権から配布されたと考えられる鏡が出土している。よって、天神山古墳に埋葬されている人は、ヤマト政権との関わりを持っていた人だということが考えられる。

2 つの古墳は隣接しており、作られた時代も引き続いているため、何らかの直接的な関係があったと考えられる。よって、金冠塚古墳も朝倉広瀬古墳群の中でも 2 つの古墳に近い場所に位置しているため、金冠塚古墳の人は、渡来人ではなくて、この二つの古墳の子孫の人なのではないかと思う。

#### 4. 古墳の形から考える

天神山古墳が作られた頃は、ヤマト政権と重要な関わりのある人しか前方後円墳を作ることが許されなかった。渡来人は前方後円墳には埋葬されないようである。初期の前方後円墳はヤマト政権に認めないと作れないもので、6世紀の後半はそうでない人でも前方後円墳が作られるようになってはいるが、渡来してきた人がすぐ作れるものではないようである。ヤマト政権に関わりのある、その地域にもともといた首長と考える方が自然である。

よって、古墳の形から考えると、天神山古墳に埋葬されている人の後継者にふさわしいと思う。

#### 5. 新羅製の金冠から考える

上毛野の人たちはヤマト政権に命じられて何度も朝鮮半島へ行っている事が日本書紀などからもわかっている。金冠塚古墳から出土した冠が新羅製の物だとすると、金冠塚古墳に埋葬されている人は、どのようにして手に入れたのかはわからないが、自分で新羅へ行ったのではないかと考えられる。

金冠塚古墳の近くにある、金冠塚古墳と同じ6世紀後半にできた不二山古墳や小泉大塚越3号古墳からも、同じような金冠が出土している。また、金冠塚古墳からは出土していないが、この地域の多くの古墳から、中央氏族や王権との関係を示す装飾付大刀が出土している。よって、この地域からたった一人で朝鮮半島へ行ったのではなく、中央氏族や王権などから命じられ、この地域の人が一群となって新羅へ行ったのではないかと考える。

インターネットで新羅の金冠を検索すると、新羅の王族の金冠に本当によく似ている。新羅の金冠は普段かぶるといよりは、儀礼の時にかぶる・副葬品用として作られているようである。

#### 6. 結論

金冠塚古墳に埋葬されている人はもともと東海地方から来た人の子孫で、かつ八幡山古墳や前橋天神山古墳に埋葬されている人の子孫でもあり、普段は朝倉広瀬古墳群のあたりにある水田地帯のリーダーで、ヤマト政権から命じられて新羅で軍事活動を行った武人であると考えられる。そして、金冠をかぶって儀礼を行う役目をしていただと思う。

## 7. 感想

まず、調べているときに思ったことは、東京国立博物館のホームページを見た時、展示されている金冠は群馬の金冠塚古墳のものと、韓国の金冠塚古墳のもののみで、その時代に大和朝廷として発展していた奈良や京都のあたりにもないものが群馬にはあるということがすごいと思った。

さらに、群馬県内の古墳からは先端の丸い輪の中に鳳凰がデザインされた装飾付大刀がたくさん出土している。この刀も朝鮮半島で作られたものであるらしい。つまり、群馬県内の多くの豪族が朝鮮半島とつながりがあって、その地域をまとめられて、中央氏族や王権との関わりを持った人がたくさんいたということで、それは群馬が良い所でいろいろな人から認められていてとてもすごいと思った。

今回調べてみて、金冠塚古墳のことはたくさん知ることができたが、朝倉広瀬古墳群の他の古墳や、同じ金冠が出土した古墳のことはまだ知らないことが多いため、これからもいろいろな古墳にふれて、群馬のことを知っていきたい。

## 参考文献

『東国文化副読本』

若狭徹著 『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館

右島和夫著 『群馬の古墳物語』上毛新聞社

高田貫太著 『異形の古墳』角川選書

前橋市教育委員会発行 『群馬の古墳時代はここから始まった 朝倉・広瀬古墳群』